

ある車中談

近藤道生

だいぶんまえのことではつきりした時期も思いたせないが、大阪から帰る途中、新幹線のなかでたまたま大平先生にお目にかかり、しかもその車輦に全くほかの客がなく、二人だけということがあった。たしか先生が大臣とか幹事長とかいうような要職におつきになっておられない時期で、わたくしもまた大蔵省をやめて浪人中であったように記憶する。

まず池田勇人論が出て、お互いに池田さんの秘書であつた頃のことを懐しむ話がひとしきり出たあとで、先生が官房長官にご就任になりたての頃の回顧談をして下さつた。

当時はほとんど毎朝のように暗いうちに団子坂のお宅を出られて、信濃町の池田総理邸に打ち合わせにいかれた。池田邸の門がしまっている時は乗りこえて入られる。警備のおまわりさんの助けを借りたということであつた。邸内に入られると、まっすぐに寝室に行つて池田ご夫妻のベッドの間に割り込み、その日の重要案件について相談をされ、朝がけの新聞記者諸公が動きはじめる頃には、なにくわぬ顔で団子坂の私邸に戻つて、これを迎えられたそつである。

安保直後の「寛容と忍耐」の頃の話で、当時新聞記者の方々が総理と官房長官とのイキの合い方に舌をまく場面がしばしばであつたそつであるが、そのうらには大平先生のこのような大変なご努力があつたことをはじめて知つた。

そうして同時に、このようなことが可能であったのは池田ご夫妻のご人徳によるもので、とくに池田令夫人のひろく温かいお人柄を、わたくし自身の体験からもあらためてしみじみと想い出した次第である。

さて列車がぼつぼつ東京に近づいた時、大平先生は窓外に目をやりながらつぶやかれた。「人間、本当の無為を退屈と感じなくなつて、退屈をこわがらなくなつたらほんものだなあ」と。

この言葉の解説をついにその後もうけたまわらなかつたので、これが先生ご自身の当時のご心境を述べられたものか、浪人中の後輩にとくに与えて下さつた教訓なのか、よくは分からなかつたが、おそらくその両方を含んでいて、しかもいつか無為をたのしむ日がくることを鶴首待望しておられた切実なお気持の発露であつたような気がしている。

「ご多忙の極の戦死にも似たご最期を知つた時、あの時の先生の横顔の陰翳がまっさきにわたくしの眼底によみがえつたのであつた。合掌。」

(博報堂社長)